

横沢Ⅱ遺跡

—主要地方道富山立山魚津線の工事に伴う発掘調査—

1998年

立山町教育委員会

序

文化財は、祖先の営みを私たちに伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく、現在の文化を理解するためにも重要なものです。中でも、埋蔵文化財はその土地に深く関係しており、郷土をよりよく知るための鍵であるといえましょう。

このたび調査の行われた横沢Ⅱ遺跡は、過去の調査で縄文時代の資料が出土する遺跡として知られており、今回の調査でも縄文時代の集落が見つかっています。

また、古代、中世の資料が出土しており、特に古代の集落は、東大寺領大藪荘墾田図にある「川枯郷」との関連を指摘できるものとして注目されます。

最後に、調査に際しご援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査にご協力いただいた地元や諸方の皆様に衷心より感謝いたします。

1998年3月

立山町教育委員会

教育長 堀田 實

例　　言

1. 本書は主要地方道富山立山魚津線の工事に伴う富山県中新川郡立山町横沢Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は立山町教育委員会が実施した。
3. 現地調査は平成9年9月22日から同年12月19日までの延べ39日間で実施した。報告書作成は平成10年3月30日までにおこなった。発掘面積は約3,500m²である。
4. 調査事務局は、立山町教育委員会に置き、社会教育課主事三鍋秀典が事務を担当し、社会教育課課長奥村忠彰が總括した。
5. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典と立山町教育委員会臨時調査員新本真之、同中島義人である。
6. 調査期間中及び本書の作成にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから有益な御教示を頂いた。記して謝意を表します。
7. 遺物の注記は「TZ II-1」とし、次にグリッド名・層位・遺構の略号・日付の順に付した。
8. 各遺構の略号はそれぞれS A = 横、S B = 建物、S D = 清、S K = 土壙、S P = 穴としている。調査の過程で遺構の種類が変更となったものもあるため、文章中では略号を用いず、それぞれの名称で記述した。
9. 遺物整理・実測・製図は三鍋・新本・中島が中心となり、河合忍・稻石純子・田中幸生（富山大学大学院生）、高志こころ・渡辺樹・磯村愛子・遠野いづみ・表原孝好・的場茂晃・片桐清恵・不鳴美穂（富山大学学生）が協力した。
10. 本書の編集・執筆は、三鍋・新本・中島が担当した。執筆分担は各文末に記した。

目 次

I 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
II 調査に至る経緯	1
III 調査概要	3
1. 立地と層序	3
2. 遺構	3
3. 遺物	8
a. 土器	
(1)縄文時代の遺物	8
(2)古代の遺物	14
(3)中・近世の遺物	16
b. 金属製品	19
c. 石製品・石器	19
(1)石製品	19
(2)石器	19
d. 木製品	21
IV 調査成果	25
参考文献	26
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 遺跡周辺の地形図	4
第3図 地形と区割図	5
第4図 遺構実測図	6
第5図 遺構尖測図	7
第6図 遺物実測図	9
第7図 遺物実測図	10
第8図 遺物実測図	11
第9図 遺物実測図	12
第10図 遺物実測図	13
第11図 遺物実測図	15
第12図 遺物実測図	16
第13図 遺物実測図	18
第14図 遺物実測図	20
第15図 遺物実測図	22
第16図 遺物尖測図	23
第17図 遺物実測図	24
付図1 西側調査区遺構全体図および南壁・東壁断面図	

I 遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の南東部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43km、南北約20km、面積は308km²である。

地勢は、三角州や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。東南部には立山を主峰とする北アルプスの山々が連なり、中央部はそこから続く山地丘陵もしくは河岸段丘、北西部が平野部である。

このように立山町は東西の比高差が大きいため、自然環境も変化に富んでおり、植生の面からは大きく4つに区分できる。

標高400m以下は、暖温帯の照葉樹林帯に属し、かつて重要な食糧資源であったカシ類が多い。

これに統いて標高600~700mまでは暖温帯の落葉樹林帯に属し、カシ類にまさる食糧資源であるクリ・コナラ・クヌギ類の生育帶で、シカ・イノシシ・ウサギ等の動物たちが育つ場でもある。

さらに標高1,500mまではブナ類の茂る冷温帯落葉樹林帯、1,500m以上は亜寒帯針葉樹林帯となっている。

今回調査をおこなった横沢II遺跡の所在する町北部地域は、常願寺川扇状地の末端部にあたる。遺跡は現在の横沢集落の北西に位置する。

周辺には縄文時代から中・近世に至るまで、ほぼ切れ目なく遺跡が存在する。

これらの遺跡の中で、横沢II遺跡の周辺にある遺跡として横沢I遺跡・利田横枕遺跡・鉢ノ木I遺跡・日水遺跡（縄文～近世）、五郎丸遺跡（縄文・古代～近世）、利田堀田遺跡・利田高見遺跡（古代～中世）、総曲輪遺跡（古代～近世）などがあげられる。

II 調査に至る経緯

遺跡のある横沢地区は、縄文時代の遺構・遺物が存在する地区として「立山町史」に記載されている。

平成8年に主要地方道富山立山魚津線特定道路事業の申請を受けて立山町教育委員会が試掘調査をおこなった。試掘調査では、河跡や柱穴などの遺構・遺物を多数検出した。

この調査をふまえ、富山県と立山町教育委員会が、協議・調整をおこない、工事予定地を対象として記録保存調査を実施することとなった。

発掘調査は、平成9年9月22日から同年12月19日までの延べ39日にわたって実施した。調査面積は約3,500m²である



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡
1.横沢II遺跡 2.横沢I遺跡 3.五郎丸遺跡
4.利田横枕遺跡 5.鉢ノ木I遺跡 6.日水遺跡
7.利田掘田遺跡 8.利田高見遺跡 9.絶曲輪遺跡

III 調査の概要

1. 立地と層序 (第1~3図、付図1)

横沢Ⅱ遺跡は、富山地方鉄道越中舟橋駅の南2km、立山町横沢に所在する。一帯は常願寺川下流域、扇状地末端部の湧水地帯にある。遺跡周辺には、細川・高野川などの中小河川が流入しており、小支谷や自然堤防などの複雑な地形を形成している。

遺跡は常願寺川・高野川によって形成された扇状地末端部の微高地上に立地する。遺跡の規模は昭和62年の遺跡分布調査で、東西約200m、南北約250mの広がりをもつことが確認されており、標高は約24~25mを測る。今年度調査区は、遺跡の南側にある。周辺は水田として利用されていた。

平成6年度に今年度調査区の南約120mにある五郎丸遺跡で調査をおこなった。この調査では、古代の掘立柱建物、中世の掘立柱建物、穴、流路を検出した。

今回の調査は、調査対象区域の中央東側を南北に流れる用水路を境にして、東西に2つの調査区を設定し、それぞれ東側調査区、西側調査区とした。東側調査区からは遺構・遺物が検出されず、遺跡の範囲外と考えられた。このため、東側調査区の調査は、表土排出の段階で完了とした。

層序は第1層・耕作土および擾乱、第2層・黒褐色土、第3層・黄褐色土をベースとする疊層の順序で堆積する。第3層は部分的に拳大の石を含む。これらの土層のうち第2層・黒褐色土から遺物が出土しており、この層が遺物包含層である。

(三鶴)

2. 遺構 (第4・5図、付図1)

土壤1 調査区中央のX2・3 Y5区で検出された。平面形態は楕円形を呈し、長軸約2.6m、深さ約30cmを測る。覆土は、第1層・黒褐色土、第2層・暗茶褐色土の順で堆積している。土壤1は、溝5と重複しており、覆土の状況から、溝5に先行すると考えられる。

遺物は、繩文時代後期後半の深鉢（第6図1）、浅鉢（第9図17）が出土している。

土壤2 調査区中央のX2 Y6~7区で検出された。平面形態は隅丸長方形を呈し、長辺約1.4m、短辺約70cm、深さ約30cmを測る。覆土は、第1層・暗褐色土、第2層・黒褐色土の順で堆積している。

遺物は、繩文時代晚期前葉の深鉢（第9図23）が出土している。

穴4 調査区中央北側のX3 Y5区で検出された。平面形態は楕円形を呈し、長軸約90cm、深さ約25cmを測る。覆土は、第1層・暗灰色土、第2層・黒褐色土、第3層・灰白色土の順で堆積している。

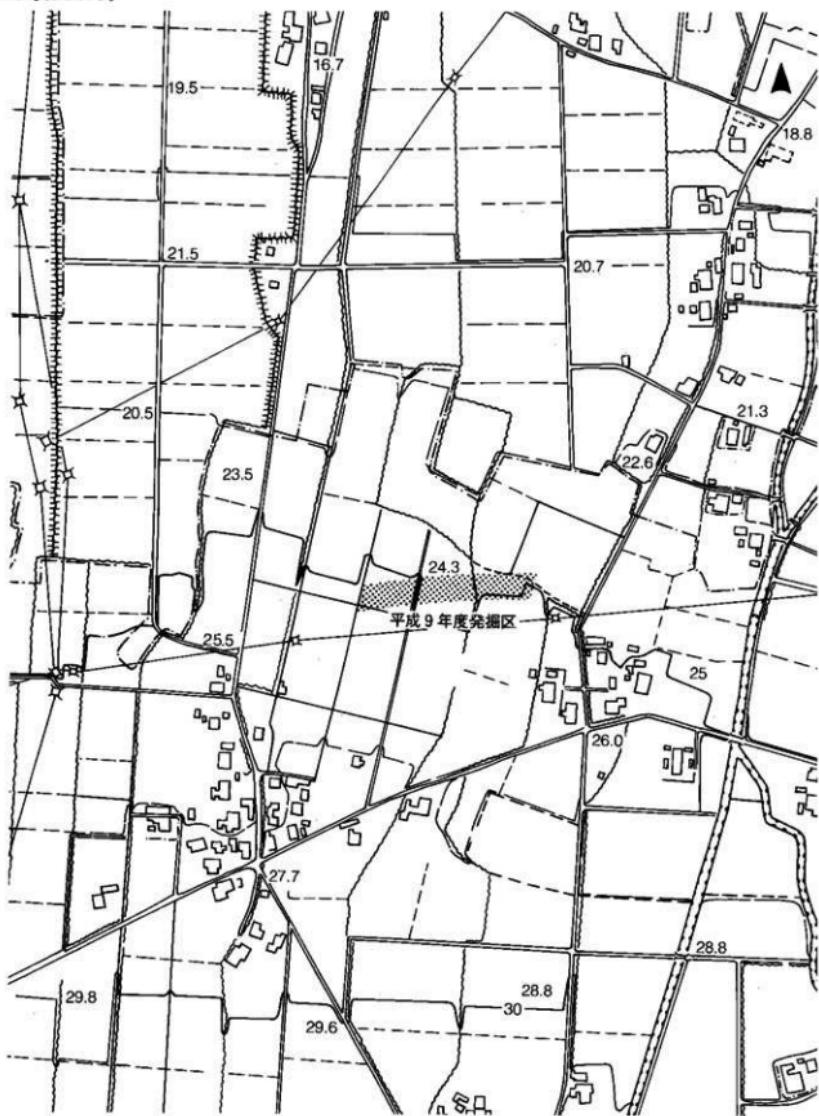
溝1 調査区中央のX2 Y5・6区で検出された。平面形態はD字の弧を東に向かってなす形をなし、幅30~60cm、深さ約15cmを測る。覆土は黒褐色土の単層である。溝1は、溝2・溝5と重複しており、覆土の状況から、溝2・溝5よりも新しいと考えられる。

溝2 調査区のX1~3 Y1~11区で検出された。西側調査区西壁中央から南東に向かってまっすぐ走っている。断面形は緩い弧を描くレンズ状の形をなし、幅は0.5~1.6m、深さ10~30cmを測る。溝底の東西端の比高差は40cm前後であり、西端の方が低い。

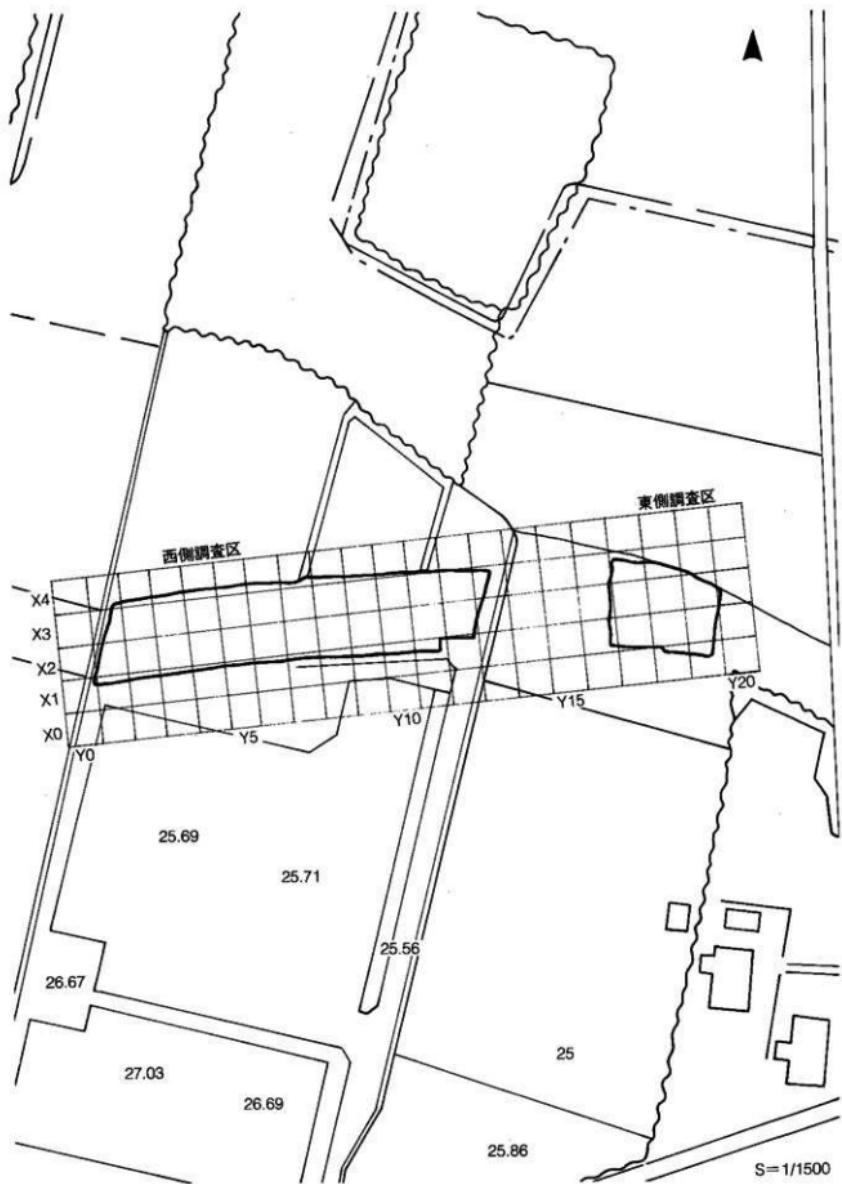
覆土は、大きく2層に分けることができ、第1層・灰白色粗粒砂、第2層・黒褐色土で、それぞれレンズ状に堆積している。発掘あたり、他の遺構と重複する部分、A-A'・B-B'・C-C'・D-D'間にセクションを設けた。このうちA-A'間では、覆土が第1層よりなる。B-B'・C-C'・D-D'間に覆土のほとんどが第

1層よりなっているが、その下位に第2層が薄く堆積している。

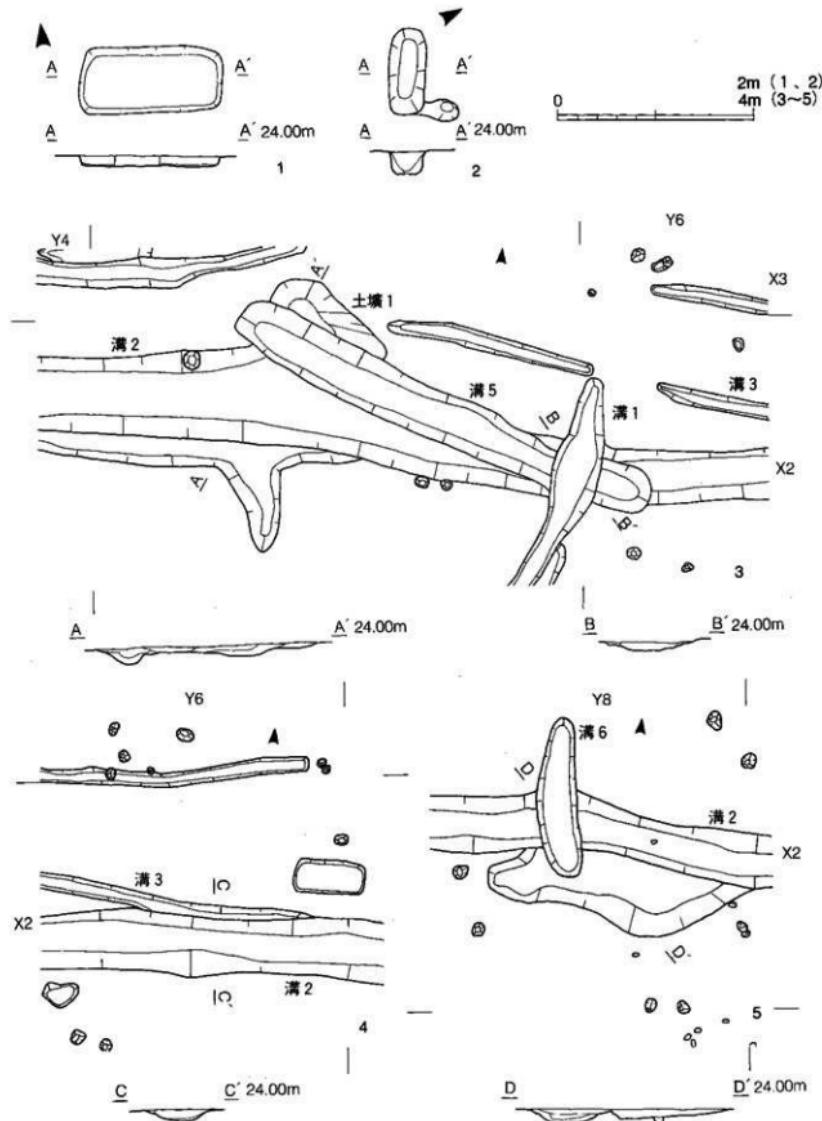
溝2は、溝1・溝3・溝5・溝6と重複しており、覆土の状況から、溝3より新しく、溝1・溝5・溝6に先行すると考えられる。



第2図 遺跡周辺の地形図



第3図 地形と区割図



第4図 遺構実測図 1.土壙2 2.穴4 3.溝1、溝2、溝5、土壙1 4.溝2、溝3 5.溝2、溝6

遺物は、第1層から縄文土器（第10図26）、須恵器杯（第11図38・40）、甕（第12図54）、板状部材（第15図99、第16図103）、曲物容器（第16図106）、箸（第17図114）、不明木製品（第17図123・128・129）が、第2層から縄文土器（第10図25）が出土している。溝2付近の灰白色粗粒砂から不明木製品（第17図127）が出土している。

溝3 調査区中央のX2 Y6区で検出された。南東にまっすぐ走る溝で、幅約20cm、深さ約10cmを測る。覆土は黒褐色土の単層である。溝3は溝2と重複しており、覆土の状況から、溝2に先行すると考えられる。

溝5 調査区中央のX2・3 Y5・6区で検出された。北西から南東にまっすぐ走る溝で、幅約80cm、深さ約10cmを測る。覆土は暗褐色粗粒砂の単層である。溝5は溝1・溝2・土壤1と重複しており、覆土の状況から、溝2・土壤1より新しく、溝1に先行すると考えられる。

溝6 調査区中央東側のX2 Y8区で検出された。平面形はD字の弧を西に向けた形をなし、幅は40~100cm、深さは約10cmを測る。覆土は、黒褐色土の単層である。溝6は溝2と重複しており、覆土の状況から溝2よりも新しいと考えられる。

溝7 調査区東側のX3・4 Y8・9区で検出された。北西から南東にまっすぐ走る溝で、幅は90cm前後、深さは約10cmを測る。覆土は黒褐色土の単層である。溝7は溝10と重複しており、覆土の状況から、溝10よりも古いと考えられる。

遺物は、珠洲甕（第13図66）が出土している。

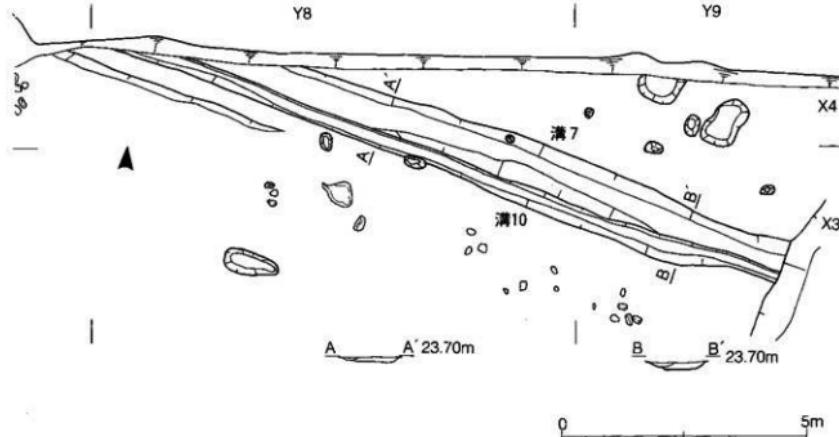
溝8 調査区中央西側のX3 Y4・5区で検出された。東西方向にのびる溝で、幅は80cm前後、深さは約10cmを測る。覆土は暗褐色土の単層である。

遺物は、須恵器杯（第11図40）が出土している。

溝9 調査区西側のX3 Y4・5区で検出された。平面形は幅約20cmの溝が西端でふくらみ、長さ約7m・幅3m前後の袋状をなしている。深さ5~10cmを測る。覆土は、黒褐色土の単層である。

遺物は、須恵器杯蓋（第11図36）が出土している。

溝10 調査区東側のX3・4 Y8・9区で検出された。幅は20~40cm、深さは約10cmを測る。覆土は暗灰色土の単層である。溝10は、溝7と重複している。覆土の状況から溝10は溝7よりも新しい。



第5図 造構実測図 溝7、溝10

溝11 調査区西側のX 2 Y 4 区で検出された。平面形はU字の弧を東に向けた形で、幅は0.4~1.4m、深さは約10cmを測る。覆土は、黒褐色土の単層である。

遺物は縄文土器（第10図27）が出土している

流路1 調査区西側のX 1 ~ 4 Y 1 ~ 2 区で検出された。南北方向に走っており、両端は調査区外にのびる。幅は1~3mを測る。南北端の比高差は約30cmであり、北側が低い。覆土は、黒褐色土の単層である。

流路2 調査区中央東側のX 1 ~ 4 Y 6 ~ 10 区で検出された。南西から北東に走っており、両端は調査区外にのびる。幅は4~6mを測る。南北端の比高差は約30cmであり、北東側が低い。覆土は、黒褐色土の単層である。

流路3 調査区東側のX 1 ~ 4 Y 10 ~ 12 区で検出された。南北方向に走っており、南北端は調査区外にのびる。幅は10~13mを測る。南北端の比高差は約40cmであり、南側が低いが、これは南壁付近に堆みがあるためであり、實際には北に向かって低くなるものと考えられる。覆土は、黒褐色土の単層である。

3. 遺物

a. 土器

(1)縄文時代の遺物（第6~10図）

1・17は土壙1から、23は土壙2から、25は溝2第2層から、26は溝2第1層から、27は溝11から、他は遺物包含層から出土している。X 4 Y 5 区・X 3 Y 7 区には、遺物包含層から埴山直上にかけて土器の集中する地点があった。遺物包含層から出土した遺物のうち、7はX 4 Y 5 区の土器集中地点から、13・16はX 3 Y 7 区の土器集中地点から出土している。

後期後葉（第6図1）井口式に比定できる一群である。

1は頸部で緩く括れる平縁浅鉢で、口径は約25cmを測る。口縁部には縦位の陰帯を貼付、平行する2条の沈線を施す。頸部は縄文地文を磨り消し、肩部には3条の沈線を施す。

後期末葉（第6図2・3、第9図8~18）八日市新保式に比定できる一群である。

2は胴部が強く屈曲し、口縁部はやや外傾する波状口縁浅鉢である。口縁部には縦横の弧文を施し、波状口縁に沿って3条の沈線が巡る。また口縁端部には刺突文が施される。

3は胴部が張り、口縁部が内済する浅鉢の口縁部である。縦横の弧文を丁寧に施し、部分的に縄文を磨り消す。

4は波状口縁の波頂部で、口縁部に沿って沈線が巡り、2条の縦位沈線が垂下する。

5は波状口縁深鉢もしくは浅鉢の口縁部で、外面には線分端三叉文を施す。

10は波状口縁深鉢の口縁部で、内面に1条の凹線が巡り、外面には2条の沈線と線分端三叉文を施す。

11は波状口縁深鉢の波底部で、外面には縦位短沈線と横位沈線を施す。本江遺跡の深鉢K類に類似する。

12は波状口縁深鉢の口縁部で、外面に2条の沈線と線分端三叉文を施す。

13は深鉢もしくは浅鉢の口縁部で、2条の沈線間に縦位の弧文を施す。

14は肩部で屈曲し、口縁部がほぼ垂直に立ち上がる波状口縁浅鉢で、外面には2条の沈線を施す。

15は平縁浅鉢の口縁部で、外面に対向弧文と縦位の沈線を施し、口縁端部には刺突文を施す。

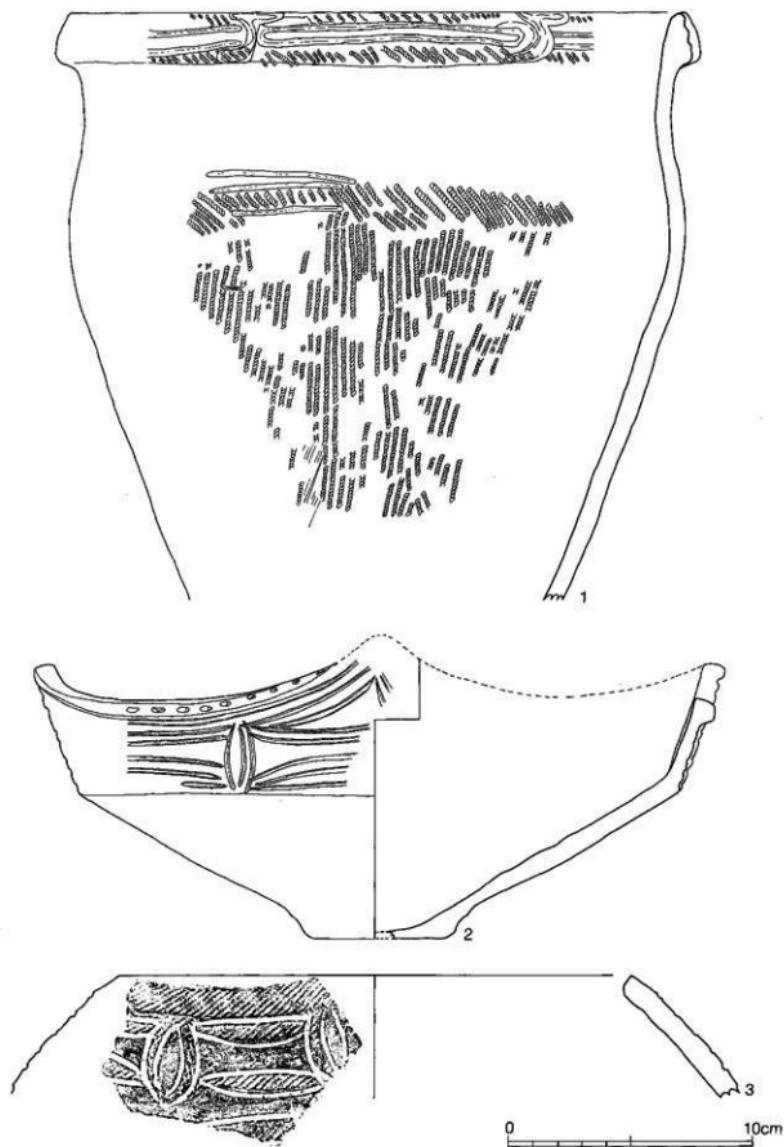
16は深鉢または浅鉢の口縁部で、外面には下方弧文を施す。

17は肩部で屈曲して、口縁部が外傾気味に立ち上がる浅鉢である。外面に柳葉文を施し、内外面ともに丁寧に研磨している。

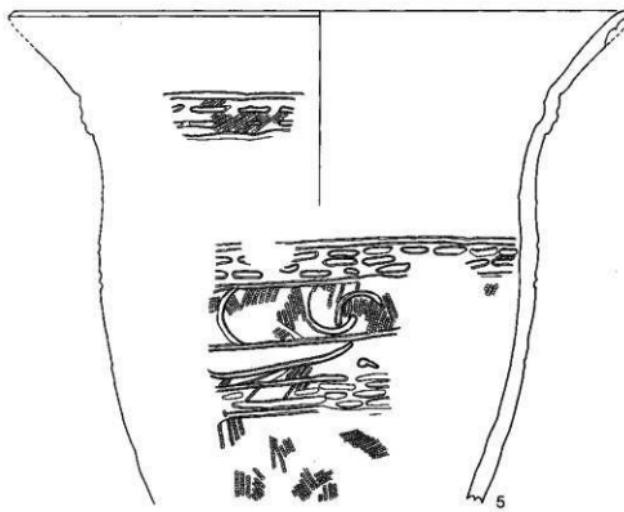
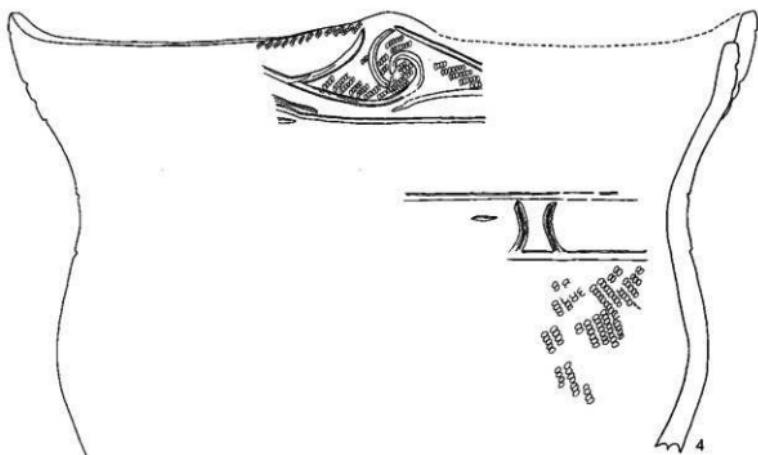
18は鉢の胴部破片で、外面に格子目文を施す。

晚期前葉（第7図4、第9図19~24）御経塚式に比定できる一群である。

4・19~21は胎土・焼成より同一個体と考えられる。緩やかな波状口縁をなし、頸部で一度括れて胴部につながる

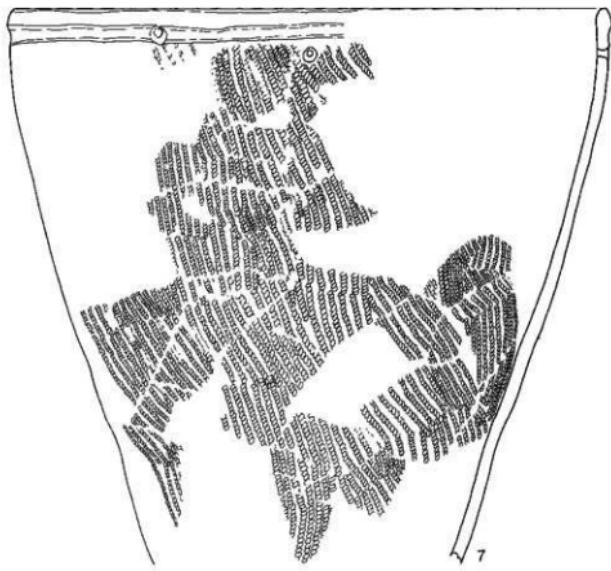
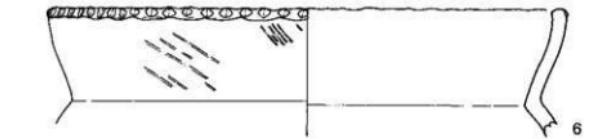


第6図 遺物実測図 1.土壤 1 その他、包含層



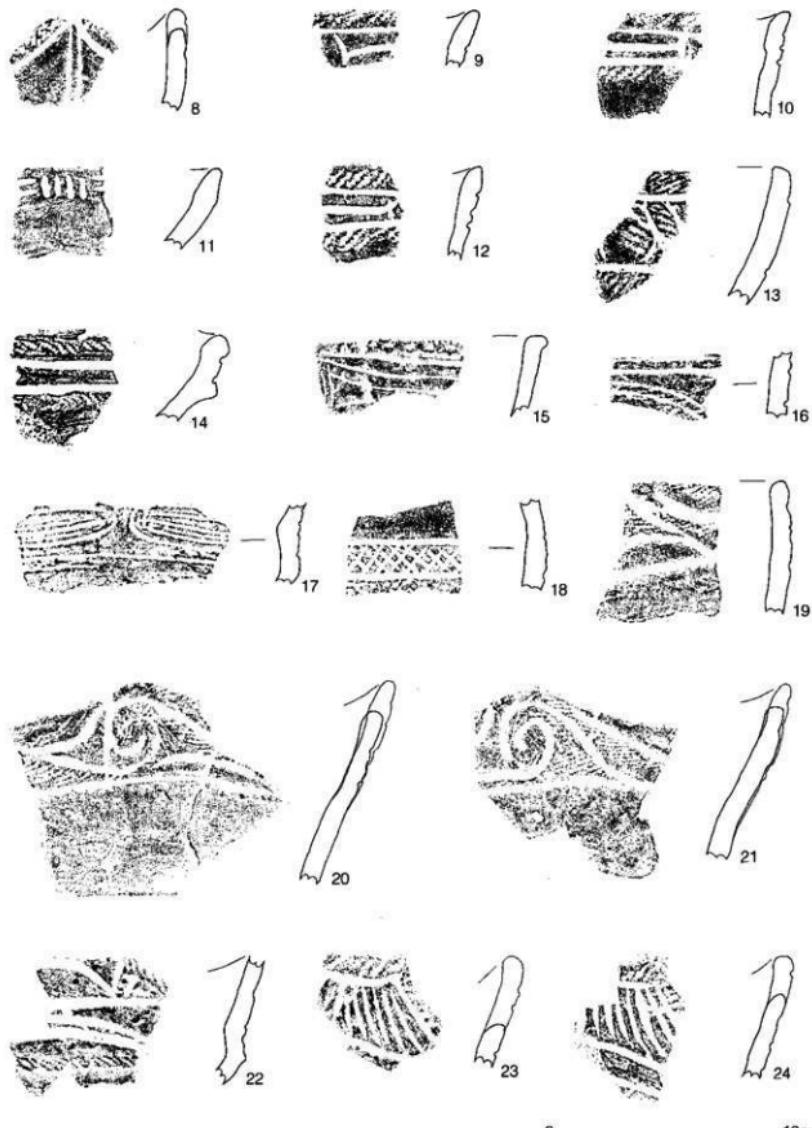
0 10cm

第7図 遺物実測図 包含層



0 15cm

第8図 遺物実測図 6.包含層 7.X4Y5 土器集中地点



第9図 遺物実測図 13・16.X 3 Y 7 土器集中区 17.土壌1 23.土壌2 その他、包含層

深鉢で、口縁部には入組三叉文を施す。頸部は繩文地文を磨り消し、2条の沈線と縦位の短い弧文を施す。

22は波状口縁の深鉢または浅鉢で、口縁部は外傾して立ち上がり、外面には沈線を挟んで下方弧文を2段施す。

23・24は胎土・焼成から同一個体と考えられる。波頂部をやや窪ませる波状口縁深鉢で、外面には沈線で区画を行った後に斜位の沈線を施す。23は土壤2から出土している。

晩期中葉（第7図5）中屋式に比定できる一群である。

5は胴部があまり張らず、口縁部が大きく外反する平縁深鉢で、口縁部内面には1条の凹線が巡る。口縁部から肩部にかけて繩文地文を磨り消し、頸部の沈線間には2段の横長列点文を施す。胴部は沈線間に2段ないし3段の横長列点文と弧文を施す。

晩期後葉（第8図6、第10図25、26）下野式に比定できる一群である。

6は頸部で強く括れる平縁深鉢で、口縁部は外方に開きながら緩く内湾する。斜位条痕を地文とし、口縁部には連続刺突文を施す。

25は直立気味に立ち上がる平縁深鉢の口縁部で、外面には変形健手文と沈線を施し、それ以下を無文とする。

26は平縁深鉢の口縁部で、口縁端部に小突起を持ち、外面には5条の凹線を施す。

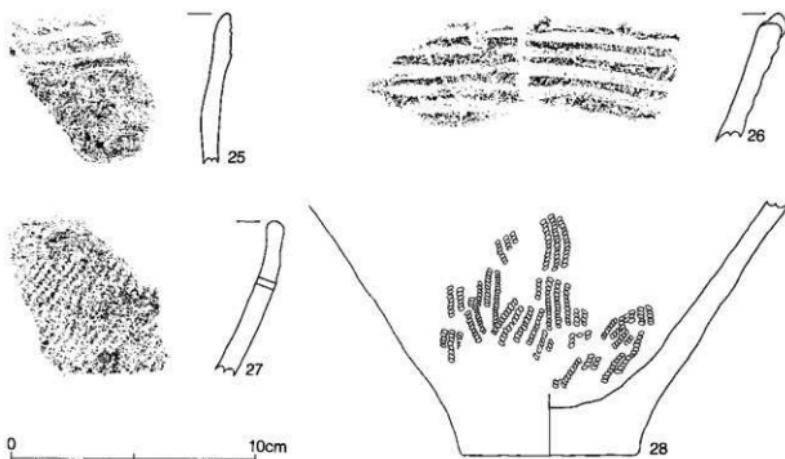
粗製土器（第8図7、第10図27）

7はバケツ状の深鉢で、口縁部はやや内湾する。斜位のR L繩文を地文とし、口縁部の繩文を磨り消して無文とする。口縁部には穿孔した部分が2ヵ所みられる。本江遺跡の平縁深鉢P類に類似する。

27は口縁部はやや内湾する深鉢で、口縁端部付近の繩文を磨り消す。本江遺跡の平縁深鉢P類に類似する。

土器底部（第10図28）

28は土器底部で、外面に繩文を施す。底面に網代压痕などはみられなかった。底部径7cmを測る。（新本）



第10図 遺物実測図 25.溝2第2層 26.溝2第1層 27.溝11 その他、包含層

(2)古代の遺物（第11・12図）

須恵器

杯蓋・杯・壺・壺がある。

杯蓋（第11図29～34）

33は溝9から、他は遺物包含層からの出土である。33が8世紀末から9世紀前半頃、その他は8世紀後半に属すると考えられる。

29は縁端部を巻き込み、天井部を回転糸切りした後、肩部に帯状のヘラケズリを施す。口径11.4cmを測る。

30は縁端部を短く折り曲げ、断面は丸味を帯びた三角形を呈する。口径12cmを測る。

31は縁端部を巻き込み、内面に継ができる。口径12cmを測る。

32は縁端部を折り曲げにより垂下させる。口径14cmを測る。

33は縁端部を巻き込み、肩部にロクロケズリを施す。口径13cmを測る。

34は縁端部を折り曲げ、断面は丸味を帯びた三角形を呈する。口径15cmを測る。

杯（第11図35～48）

35は溝2第1層からの出土、37は溝2第1層と溝8からの接合、45は表採である。他は遺物包含層からの出土である。いずれも8世紀後半のものと考えられる。

35・36は杯Aである。

35は体部外面から内面にロクロナデを、底部内面に一度仕上げナデを施す。底部は回転ヘラ切り後にナデを施す。口径12.4cm、器高3.2cmを測る。

36は内外面にロクロナデを施す。口径11.8cm、器高3.7cmを測る。

37は後碗である。体部外面と底部内面にロクロナデを施す。底部外面は回転ヘラ切り痕をナデ消し、高台を貼り付ける。口径10.8cm、器高3.7cmを測る。

38～42は杯Bの底部である。

42は底部内面のほぼ全面に仕上げナデを施す。高台は張り付けである。内面はロクロナデを施す。

43～48は杯の口縁部の破片である。いずれも内外面にロクロナデを施す。

壺（第12図49・50）

いずれも遺物包含層からの出土である。8世紀後半のものと考えられる。

49は広口壺の口縁部である。口縁端部は上下に拡張し、内外面に自然輪がかかる。

50は肩部の破片である。内外面にロクロナデを施し、外面は上下に二条ずつの沈線を巡らせ、自然輪がかかる。

壺（第12図51・52）

51は溝2第1層から、52は遺物包含層からの出土である。いずれも8世紀後半のものと考えられる。

51は口縁端部が内側に肥厚し、口縁部外面に凸帯が付き、内外面に自然輪がかかる。

52は口縁端部が内側に肥厚し、口縁部外面の凸帯の下に三条の波状文を施す。

土師器

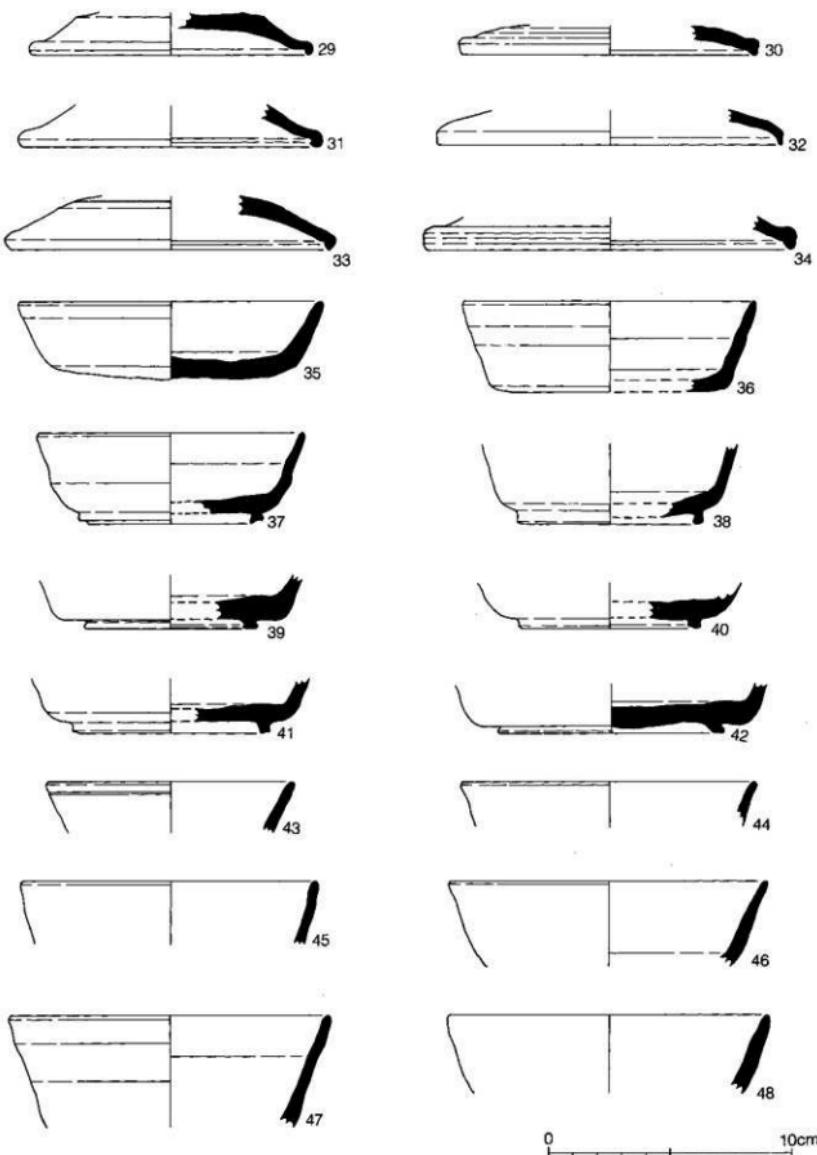
壺がある。

壺（第12図53～55）

いずれも遺物包含層からの出土である。8世紀後半のものと考えられる。

53・54は口縁端部をナデにより面取りし、内外面にロクロナデを施す。

55は口縁端部をナデにより面取りし、口縁部内面と体部外面にカキメを施す。



第11図 遺物実測図 33.溝9 35.溝2第1層 37.溝2第1層・溝8 45.表採 その他、包含層

(3)中・近世の遺物 (第13図56~82)

中世遺物は土師質土器・輸入陶磁・珠洲があり、近世遺物は肥前陶磁・瀬戸美濃・越中瀬戸・土製人形がある。

土師質土器 (第13図56~58)

皿形のものがある。遺物包含層からの出土である。いずれも15世紀代のものと考えられる。

56はわずかに内湾する低い口縁部を有し、内外面にナデ調整を施す。口径7cm、器高1.1cmを測る。

57は内湾気味に立ち上がる口縁部を有し、内外面にタールの付着がみられる。口径7cm、器高1.8cmを測る。

58は薄くつままれた外傾気味の口縁部を有する。口径9cm、器高1.1cmを測る。

輸入陶磁 (第13図59・60)

白磁角杯と青磁碗がある。いずれも遺物包含層からの出土である。59は14世紀後半~15世紀後半、60は14世紀中葉~15世紀前半のものと考えられる。

白磁 (第13図59)

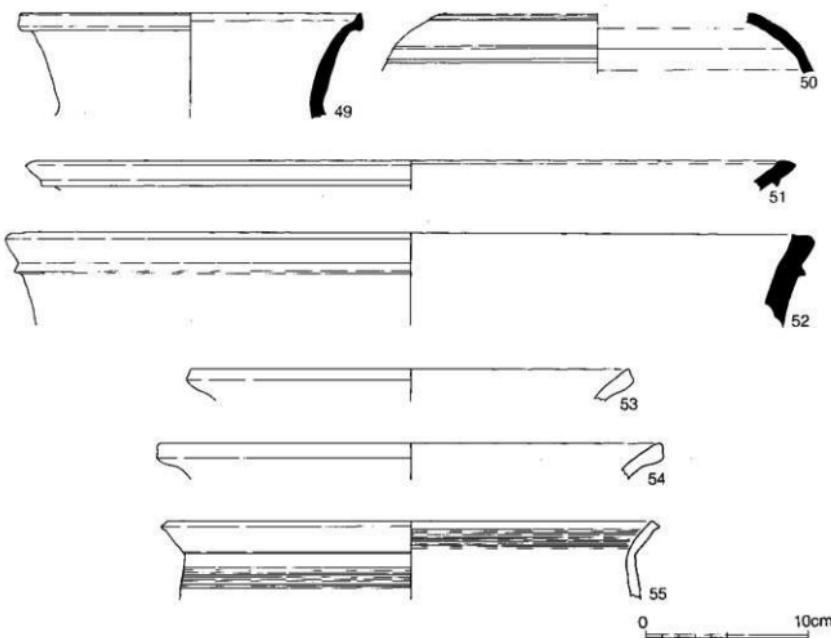
59は角杯で、高台部分にレンズ状の浅い抉りが施される。高台径3cmを測る。

青磁 (第13図60)

60は鎬連弁紋を有する碗で、口縁端部を若干外反させている。

珠洲 (第13図61~66)

壺・壺・指鉢がある。



第12図 遺物実測図 51.溝2 第1層 その他、包含層

壺（第13図61・62）

いずれも遺物包含層からの出土である。61は13世紀代、62は15世紀代のものと考えられる。

61は口縁部は緩いカーブを描くように外反させ、端部外面に強いナデを施すことによってシャープな端面を形成している。口径9.2cmを測る。

62は丸みを帯びた口縁端部とやや外傾しつつ延びる体部を有する。口径14cmを測る。

壺（第13図63）

溝7から出土している。13~14世紀代のものと考えられる。

63は体部で、叩打原体は3cm幅に11条施される。

擂鉢（第13図64~66）

いずれも遺物包含層から出土している。64・65は14世紀代、66は13世紀代のものと考えられる。

64は口縁端部が丸みを帯びるもので、極細の沈線を施す。口径30cmを測る。

65は上方に端面をもつ口縁部を有するもので、端部は丸く收められる。口径34cmを測る。

66は口縁端部を外方にやや強く引き出している。内面には御目が施されるが、その単位は1cmあたり6本で、口径36cmを測る。

肥前陶磁（第13図67~69）

皿がある。いずれも遺物包含層から出土している。70・71は18世紀代、72は19世紀代のものと考えられる。

67は唐津焼で、内外面に透明釉が施される。口径13cmを測る。

68は肥前地域の製品と考えられる陶器で、内外面に銅錫釉が施される。口径14cmを測る。

69は肥前地域の製品と考えられる磁器で、内外面に青磁釉が施される。内面底部には、蛇ノ目釉ハギ調整を施す。

高台径4.2cmを測る。

瀬戸美濃（第13図70）

豆皿がある。遺物包含層から出土している。16世紀後半代のものと考えられる。

70は底部付近の部分で、ゴケ底を有しており、内面底部には八弁の印花が施される。内外面に灰釉が施される。底部径2.8cmを測る。

越中瀬戸（第13図71~81）

天目碗・丸碗・皿・短頸壺・擂鉢がある。いずれも遺物包含層から出土している。17~18世紀代のものと考えられる。

天目碗（第13図71・72）

71はやや外反気味に伸びる口縁部と直立気味に丸くおさめられる端部をもつもので、外面腰部から内面にかけて鉄釉が施される。口径9.6cmを測る。

72は削り出し高台を有するもので、外面の一部と内面底部には鉄釉が施される。高台径4.8cmを測る。

丸碗（第13図73~75）

73は付輪高台を有するもので、外面腰部から内面にかけて鉄釉が施される。高台径5cmを測る。

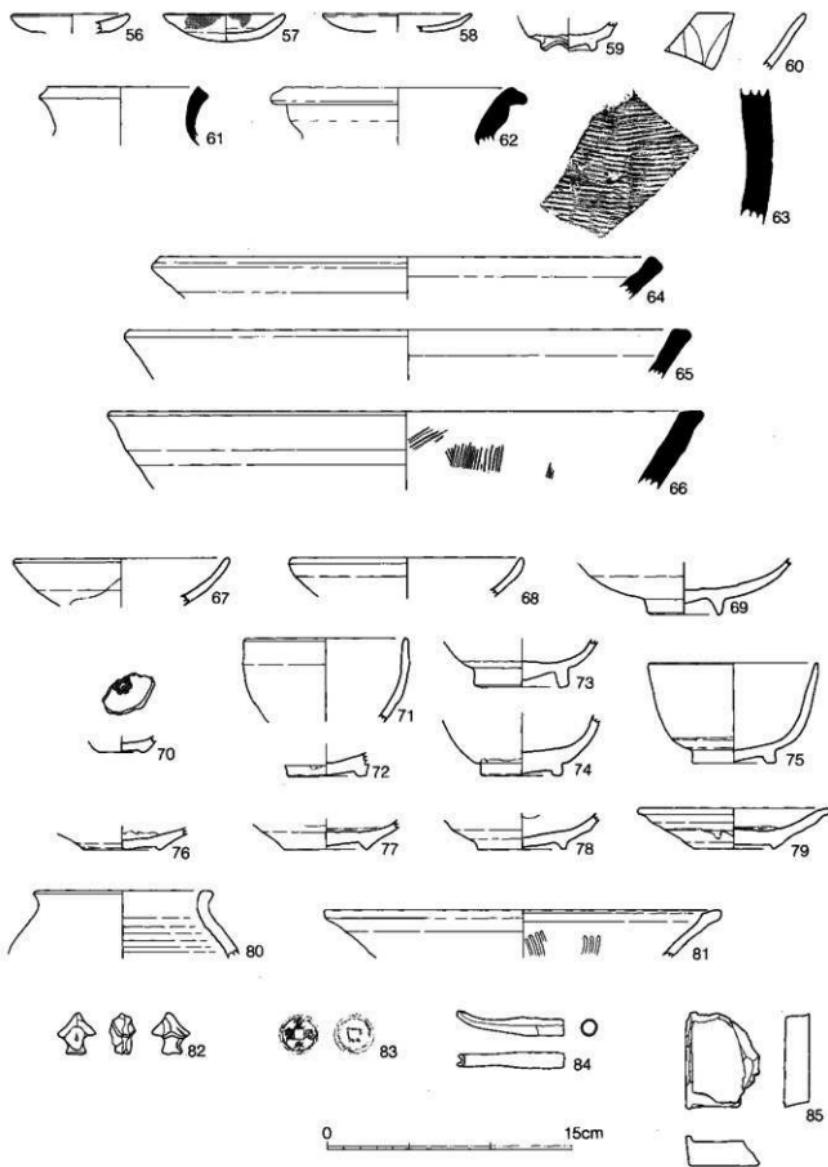
74は削り出し高台を有するもので、外面腰部から内面にかけて鉄釉が施される。高台径6cmを測る。

75は直立気味の削り出し高台を有するもので、外面腰部から内面にかけて鉄釉が施される。口径10.6cm、高台径5cm、器高6.3cmを測る。

皿（第13図76~79）

76は高台内を削り込むもので、見込みの部分を残して鉄釉が施される。高台径4.8cmを測る。

77は高台内を削り込むもので、内面底部を残して鉄釉が施される。高台径5cmを測る。



第13図 遺物実測図 66.溝7 その他、包含層 ※トーン部分はカーボンの付着を示す

78は貼り付け高台を有するもので、内面底部をかけ残して鉄軸が施される。高台径5.4cmを測る。

79は皿A（丸皿）で、見込みにゆるい段があり、そこから体部外面中央まで灰釉が施される。口径11.6cm、高台径4.8cm、器高2.5cmを測る。

壺（第13図80）

80は短い口縁部となで肩の体部を有するもので、内外面に鉄軸が施される。口径10.8cmを測る。

壺鉢（第13図81）

81は口縁部を折り返し、角張った端部を形成するもので、内外面に鉄軸が施される。口径24cmを測る。

土製人形（第13図82）

遺物包含層からの出土である。18～19世紀代のものと考えられる。

82は土製人形の頭部で、てづくねによって成形されており、首部から下は折れて欠損している。全体的なフォルムから、女性をモデルにしたものと考えられる。

b. 金属製品

鏡貸・煙管がある。

鏡貸（第13図83）

遺物包含層からの出土である。17世紀代のものと考えられる。

83は字体から古寛永鏡と考えられるもので、背面に文字などはみられなかった。

煙管（第13図84）

遺物包含層からの出土である。18世紀代のものと考えられる。

84は肩なしに移行する段階のものとみられる雁首で、火皿を欠損している。

c. 石製品・石器

(1) 石製品（第13図85）

硯がある。

硯（第13図85）

遺物包含層からの出土である。18～19世紀代のものと考えられる。

85は丘を中心とした部分の破片で、硯側および硯陰には墨が付着している。

（新本）

(2) 石器（第14図）

出土した石器は、すべて縄文時代に属するものである。

磨製石斧（第14図86）

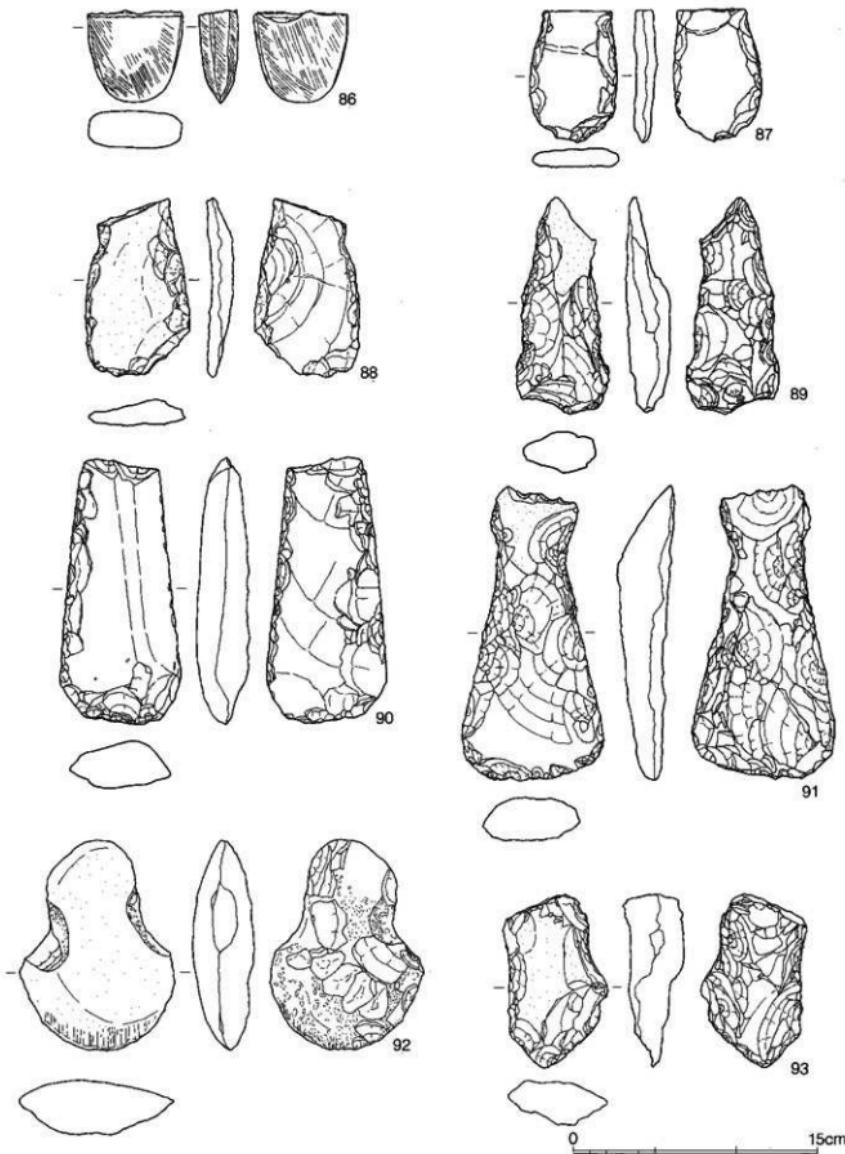
86は定角式磨製石斧の基部欠損品であり、X 2 Y 11から出土した。残存長5.6cm、最大幅5.6cm、重量115.4gを測る。石材は砂岩である。

打製石斧（第14図87～93）

87はX 3 Y 4から出土したものであり、平面形は短冊形を呈する。残存長8.1cm、最大幅5.3cm、重量76.9gを測る。石材は凝灰岩であり、表面の風化が著しい。基部を欠損する。

88はX 2 Y 5から出土したものであり、平面形は短冊形を呈する。残存長11cm、最大幅6.4cm、重量127.2gを測る。石材は粘板岩であり、基部を欠損する。

89はX 3 Y 12から出土したものであり、平面形は短冊形を呈する。最大長13.3cm、最大幅5.7cm、重量182.5g、石材は頁岩である。



第14図 遺物実測図 包含層

90はX 1 Y 9から出土したものであり、平面形は短冊形を呈する。最大長16.3cm、最大幅7.3cm、重量456.3g、石材は泥岩である。

91はX 3 Y 1から出土したものであり、平面形は短冊形を呈する。最大長18cm、最大幅8.7cm、重量449.7g、石材は凝灰岩である。

92はX 3 Y 1から出土したものであり、平面形は短冊形を呈する。最大長12.9cm、最大幅9.5cm、重量459.1g、石材は砂岩である。

93はX 2 Y 4から出土したものであり、平面形は短冊形を呈すると考えられる。残存長10.6cm、最大幅6.1cmで、重量は232.5gある。石材は凝灰岩であり、基部を欠損する。

(中島)

d. 木製品

漆器・板状部材・曲物容器・箸・不明木製品がある。

漆器（第15図94・95）

遺物包含層から出土している。いずれも横木挽きであり、器種は椀および皿がある。

94は椀の高台脇の部分から体部上方までの部分で、内外面に黒漆が塗られる。体部最大径は13.6cmを測る。

95は皿の底部から体部下半にかけての部分で、内外面には黒漆が塗布される。高台径5.8cmを測る。

板状部材（第15図96～99、第16図100）

穿孔・抉り・面取りがみられる板状の部材があるが、これらの用途ははっきりしなかった。99と103は溝2第1層から、他は遺物包含層から出土している。

96は側面に面取りを施すもので、外面および端部は腐食している。

97は一方の端部に浅い段を設けるもので、外面に面取りを施す。

98は全体に面取りを施すもので、側面および端部は腐食している。

99は方形の抉りを設けるもので、外面および端部は腐食している。

100は外面に面取りを施すもので、側面および端部は腐食している。

曲物容器（第16図101～103）

101・102は遺物包含層、103は溝2第1層から出土している。

いずれも底板と考えられ、片面のみ外周端部を浅く削り落としている。径は101と102が17cmであり、103が18cmであり、厚さはいずれも0.7～0.8cmを測る。

箸（第17図104～116）

111が溝2第1層から、その他は遺物包含層から出土している。

全形を把握しうるものは114のみであり、長さ19cmを測る。いずれも側面を面取りしており、断面形は多角形・隅丸方形となるものが多い。

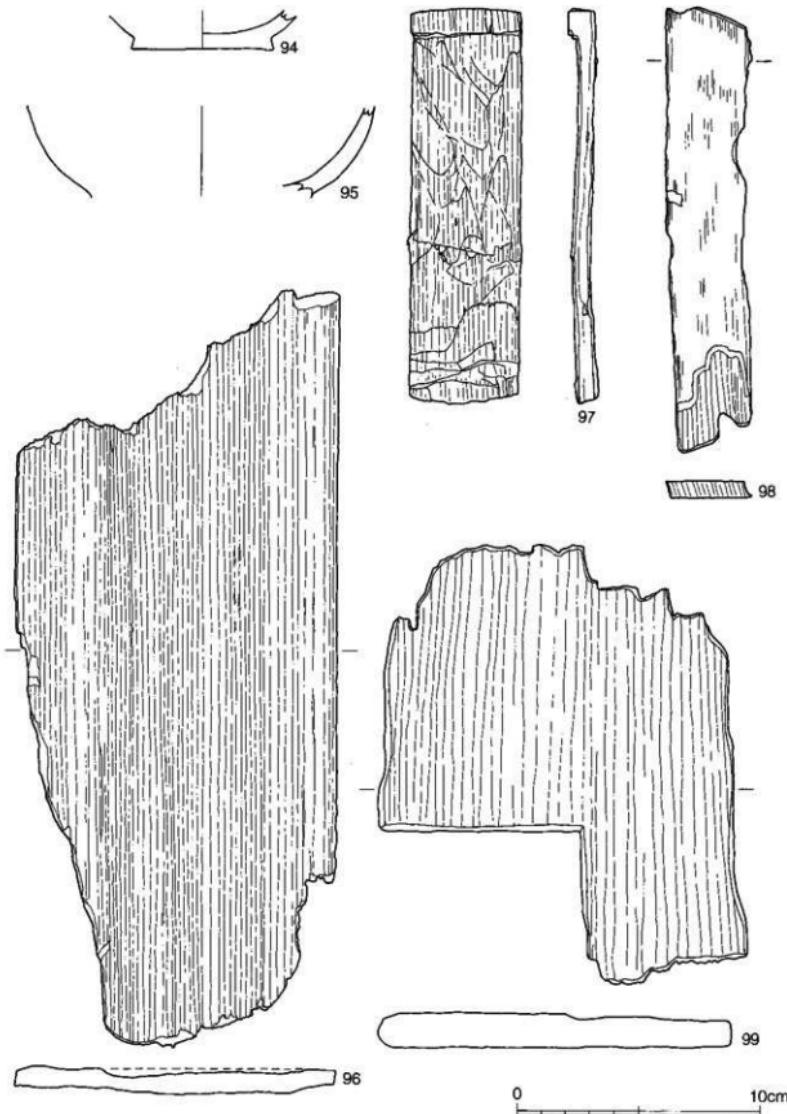
不明木製品（第17図117～126）

板状のものと棒状のものがある。120・125・126が溝2第1層から、124が溝2付近の灰白色粗粒砂から出土しており、他は遺物包含層からの出土である。

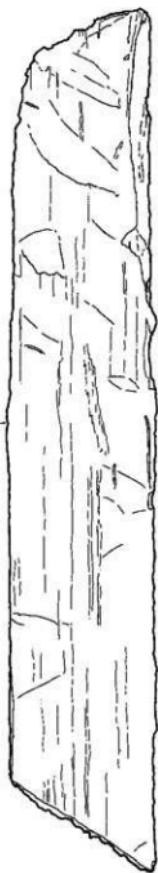
板状のものには、両面を面取りするものが多く、厚さ0.1～0.4cmを測る。

棒状のものには多角形に面取りを施したのちに先端を尖らせるもの、方形に面取りを施すものなどがみられた。厚さは0.8～1.5cmを測る。

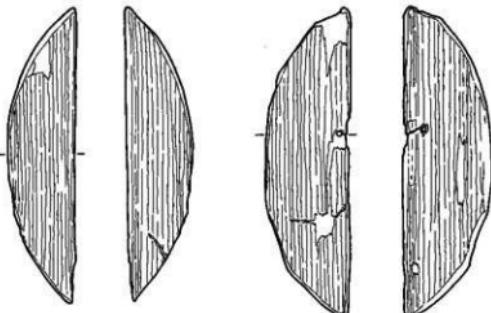
(新本)



第15図 遺物実測図 99.溝2第1層 その他、包含層

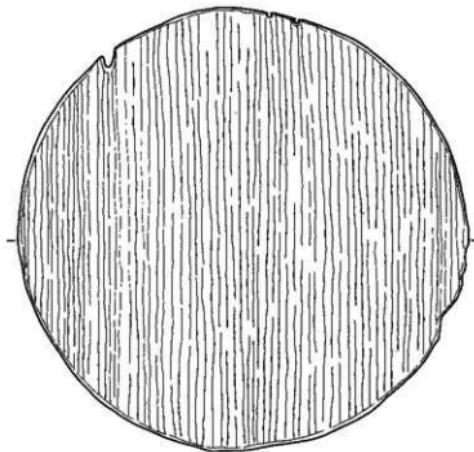


100



101

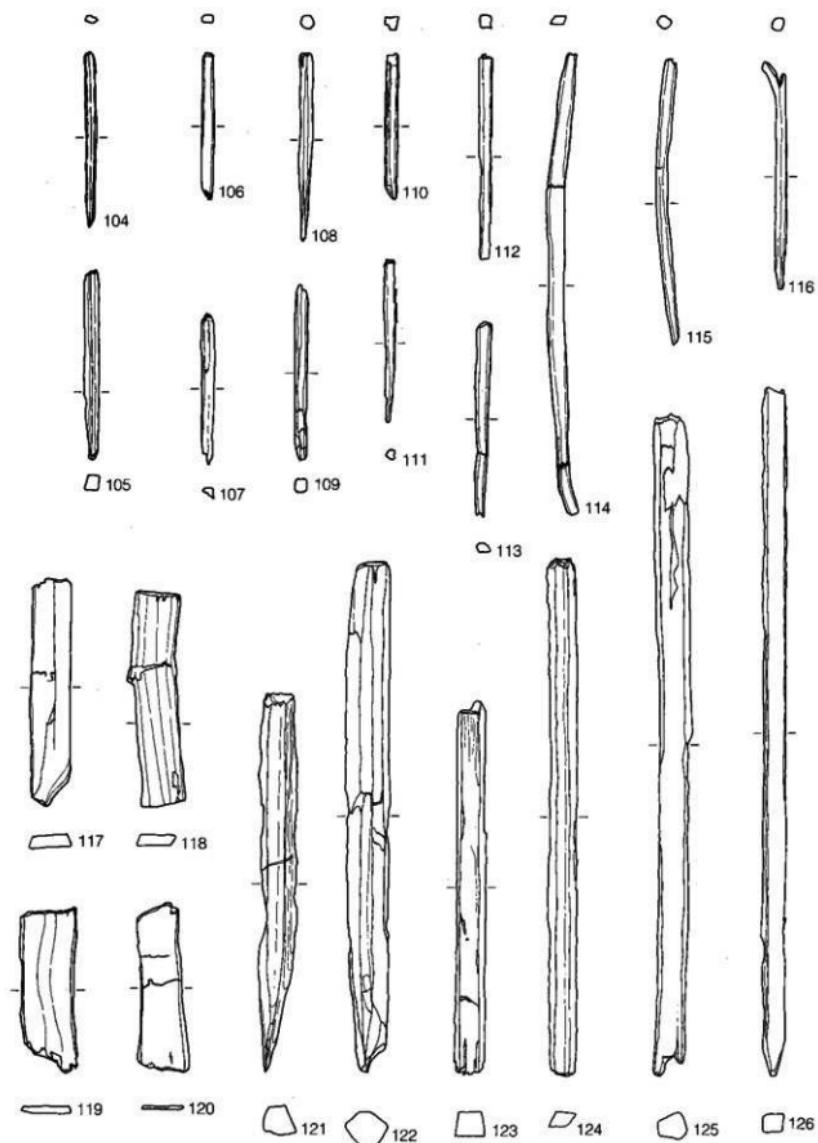
102



103



第16図 遺物実測図 103-106.溝2 第1層 その他、包含層



第17図 遺物実測図 114.溝2第1層 127.溝2付近の灰白色粗粒砂 その他、包含層

IV 調査成果

今回の調査で得られた新知見は以下の通りである。

1. 遺跡は、縄文時代、古代および中世の集落跡と考えられる。
2. 今年度調査区のうち、東側調査区からは遺構・遺物が全く検出されず、ここが遺跡の東限と考えられる。
3. 遺構は、土壙2基、穴234、溝17本、流路3本を検出した。
 - 土壙1は、出土遺物から縄文時代後期後半に属すると考えられる。
 - 土壙2は、出土遺物から縄文時代晩期に属すると考えられる。
- 溝は、西側調査区のほとんどの地区で検出している。このうち溝2は、出土遺物から縄文時代晩期の溝を8世紀後半に再利用したと考えられる。出土遺物から所属年代がわかるものとしては、溝7・溝8・溝9・溝11がある。溝7は13~14世紀、溝8は8世紀後半、溝9は8世紀末~9世紀前半、溝11は縄文時代晩期に属すると考えられる。
4. 縄文時代の遺物は、遺構内から出土したものとして、土壙1、土壙2、溝2第2層があり、他は遺物包含層から出土した。出土遺物の所属年代は、後期後半の井口式期から晩期後半の下野式期までである。このなかでも特に後期後半の井口式期から八日市新保式期にかけての遺物が多くみられた。
5. 古代の遺物は、遺構内から出土したものとして、溝2第1層、溝8・溝9があり、他は遺物包含層から出土した。出土遺物の所属年代は、8世紀後半~9世紀後半までである。
6. 中・近世の遺物は、遺構内から出土したものとして、溝7があり、他は遺物包含層から出土した。出土遺物の所属年代は、中世が13~15世紀、近世が16世紀後半~19世紀までである。
7. 今回の調査成果と平成6年度におこなった五郎丸遺跡の調査成果を比べてみると、所属年代や遺構・遺物に共通する点が多く、同一の遺跡である可能性がかなり高いといえる。これは、遺跡周辺の微高地が、縄文時代後期から利用され、8世紀後半にはかなり開発が進んだ先進地域であったことを示している。
8. 平成6年度に実施した五郎丸遺跡の調査成果では、調査で確認された古代集落と「東大寺大蔵莊」墾田団にある「川枯郷」の関連について述べている。「川枯郷」の存続期間は、明確ではないが、墾田団の成立した8世紀には存在していたと考えられる。今回の調査で確認された古代集落は、「川枯郷」かその近辺の集落と考えられ、8世紀後半から9世紀前半まで存続している。

(三編)

参考文献

- ア 有田町 1988 「有田町史」古窯編
- イ 池野正男 1987 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」「大境」第11号 富山考古学会
石川県埋蔵文化財センター 1989 「金沢米泉遺跡」
- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 「シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題」報告編
- カ 金沢市教育委員会・石川県鉄鋼団地協同組合 1992 「金沢市中屋サワ遺跡」
- 上市町教育委員会 1984 「弓庄城跡－第4次緊急発掘調査概要－」
- コ 小島俊彰 1979 「本江遺跡」「滑川市史」考古資料編
- ス 鈴木道之助 1991 「石器入門事典 縄文」 柏書房
- 珠洲焼資料館 1989 「珠洲の名陶」 珠洲市立珠洲焼資料館
- タ 立山町 1977 「立山町史」上巻
立山町教育委員会 1997 「雄山山頂遺跡－雄山神社峰木社社殿替事業に伴う調査－」
- 立山町教育委員会 1995 「五郎丸遺跡」
- 立山町教育委員会 1987 「辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要」
- 立山町教育委員会 1991 「辻遺跡－第2次発掘調査報告－」
立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1988 「立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ、立山町文化財報告書第5冊」
- ト 東京都新宿区教育委員会 1988 「三栄町遺跡」
富山県埋蔵文化財センター 1991 「北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町纏6－境A遺跡土器編」
- 富山県埋蔵文化財センター 1994 「吉倉B遺跡」
- 富山大学人文学部考古学研究室 1989 「越中上末窯」
- 富山大学考古学研究室・石川考古学研究会 1993 「珠洲大畠窯」
- ノ 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 「真脇遺跡」能都町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団
- ホ 北陸中世土器研究会 1992 「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」
- 北陸中世土器研究会 1995 「中世北陸の木製容器」
- マ 埋蔵文化財研究会第39回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1996 「古代の木製食器」
- ミ 宮田明 1995 「富山市岩瀬天神遺跡出土の縄文土器について」「富山市考古資料館紀要」第14号 富山市考古資料館



横沢Ⅱ遺跡

横沢Ⅱ遺跡

昭和41年撮影

図版 3

東側調査区全景
(上から)



図版4

1. 西側調査区全景
(西から)



2. 西側調査区全景
(東から)



図版 5

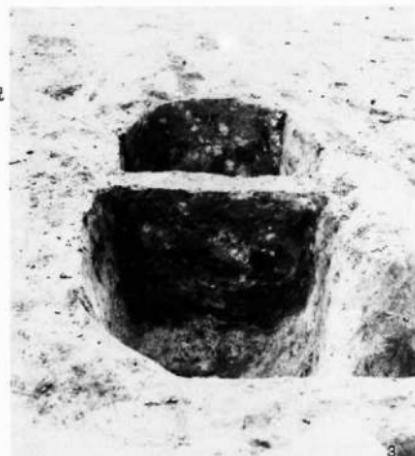
1. 溝 2 土層
(西から)



2. 溝 7・10 土層
(東から)



3. 穴 4 土層
(東から)



4. 溝 2
木製品出土状況
(南から)



圖版 6

1. X4Y5
土器出土状况
(第10圖7)



2. X3Y7
土器出土状况
(第9圖4)



3. 土壤1 土器出土
状况
(第8圖1)

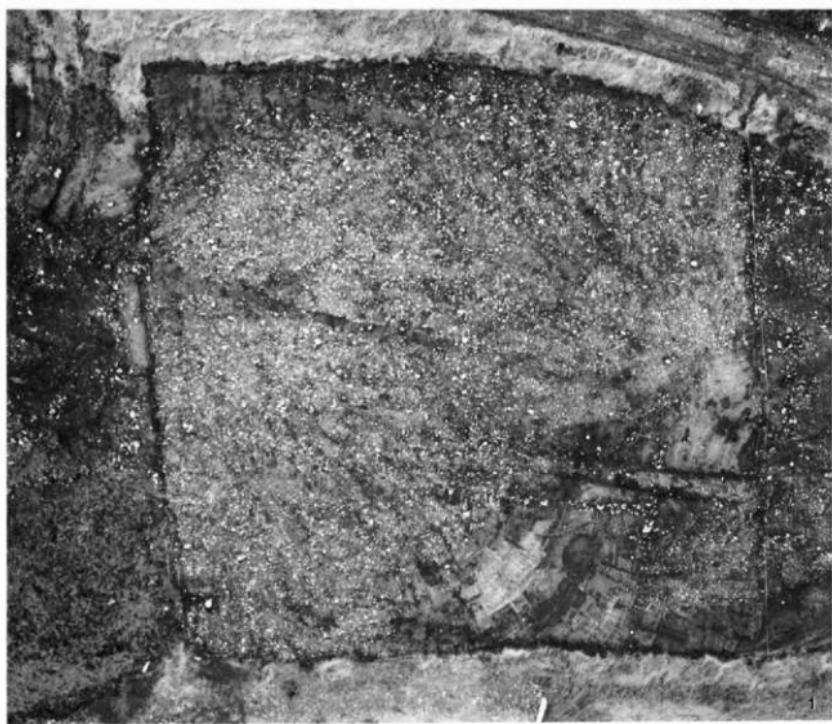


4. 溝2 完掘状况



図版7

1. 東側調査区全景
(上から)



2. 東側調査区全景
(東から)



図版8

遺物写真

- 1. 土壙
- 35. 溝2第1層
- 37. 溝2第2層・
溝8
- その他. 包含層



1



7



35



37



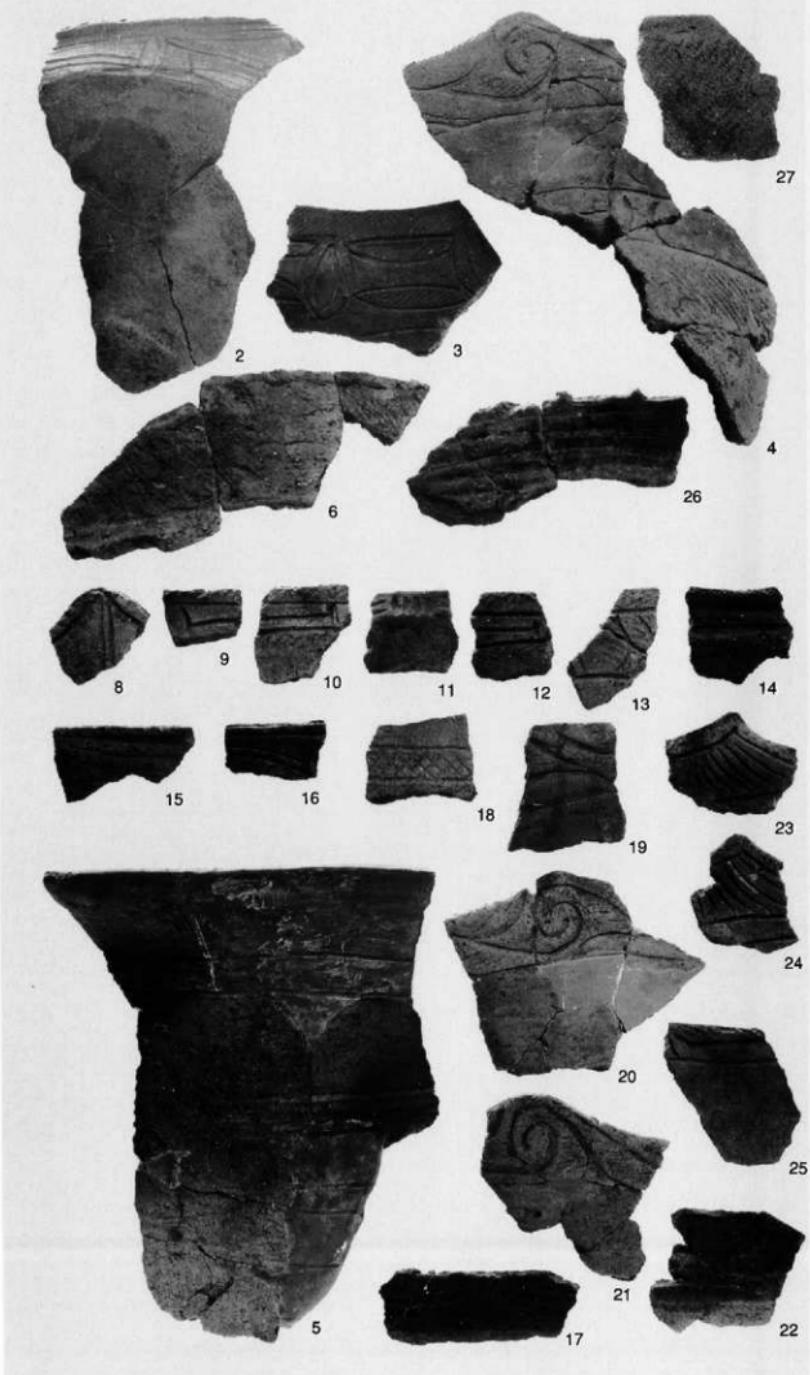
75



79

図版9

遺物写真
17. 土壙1
23. 土壙2
25. 26. 溝2
27. 溝11
その他. 包含層



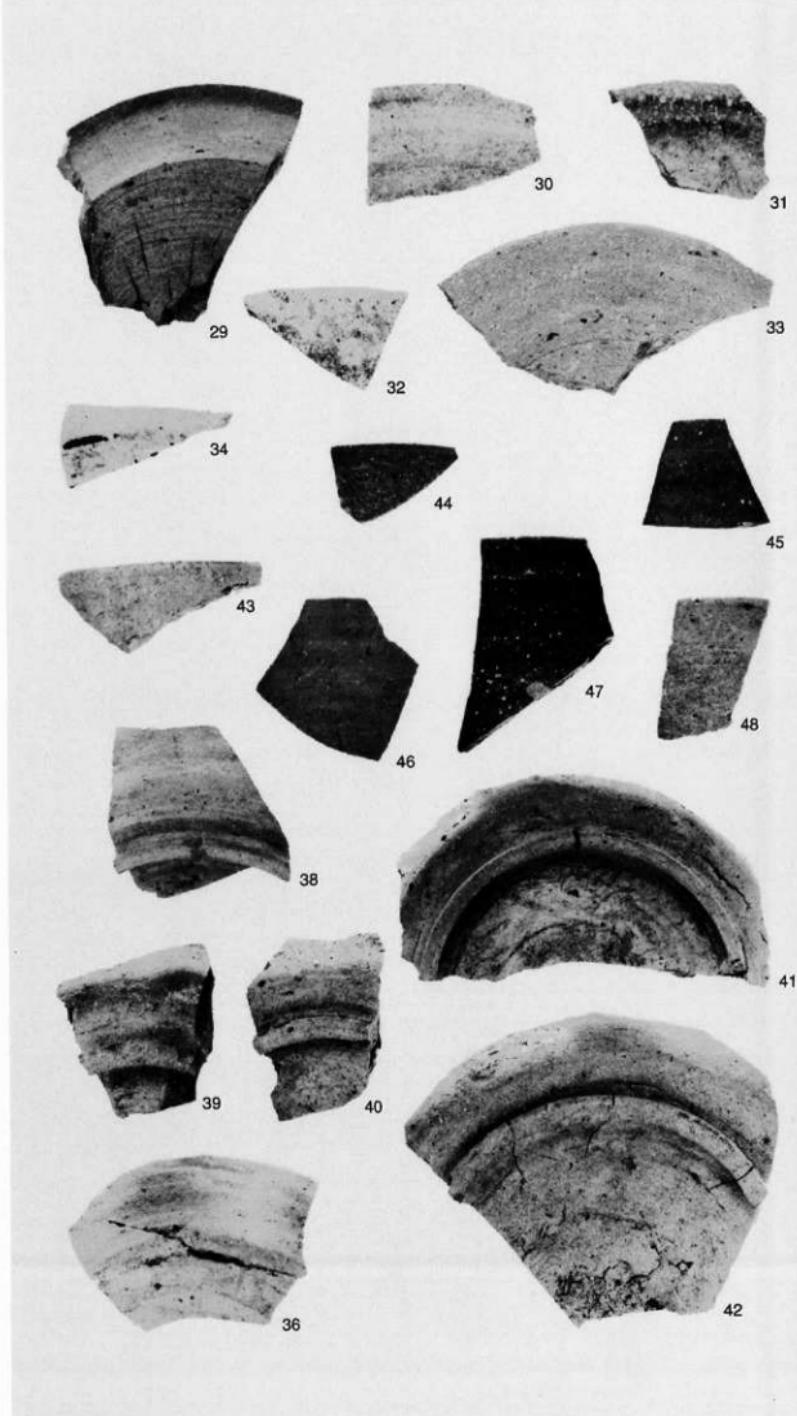
図版10

遺物写真

33. 溝9

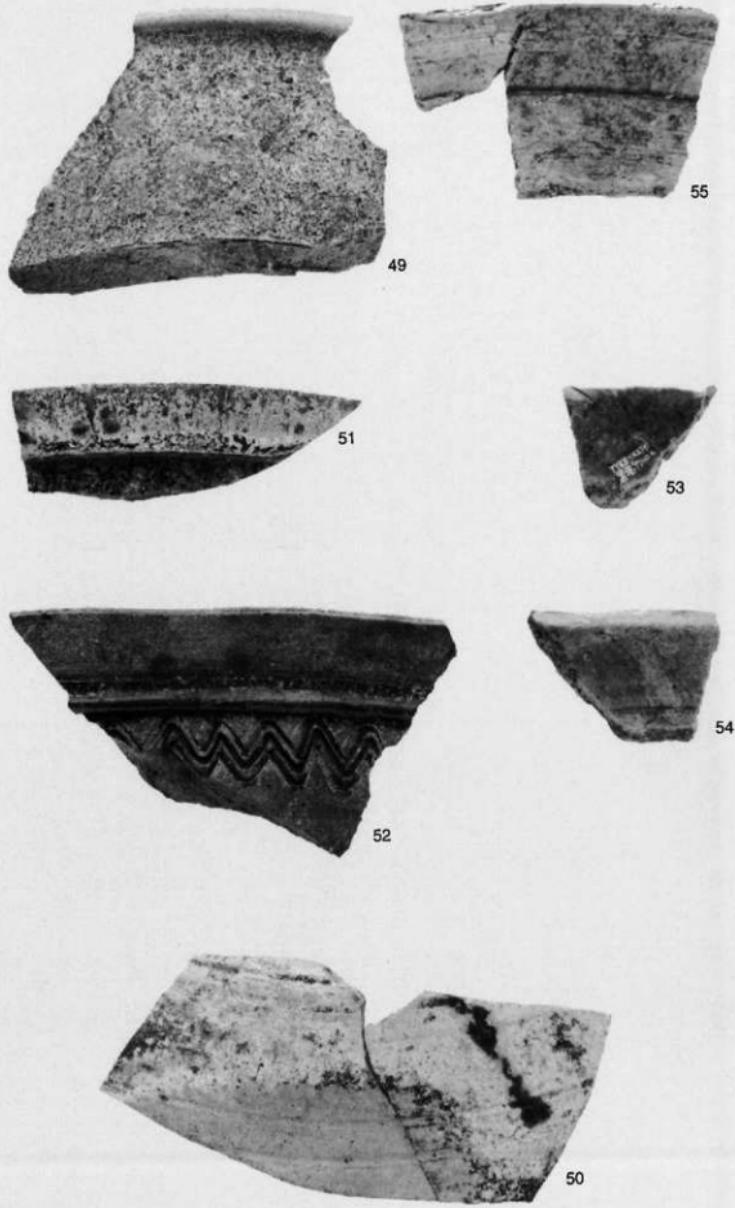
45. 羨探

その他. 包含層



図版11

遺物写真
51. 溝2第1層
その他. 包含層



図版12

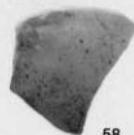
遺物写真

63. 溝.7

その他、包含層



56



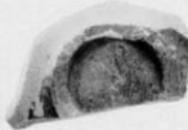
58



57



60



59



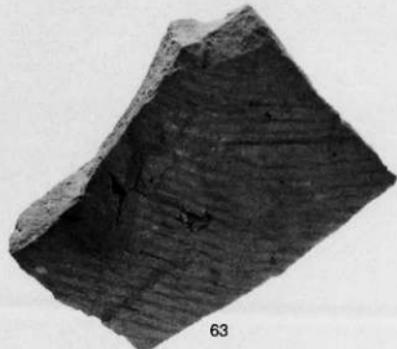
66



61



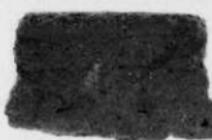
62



63



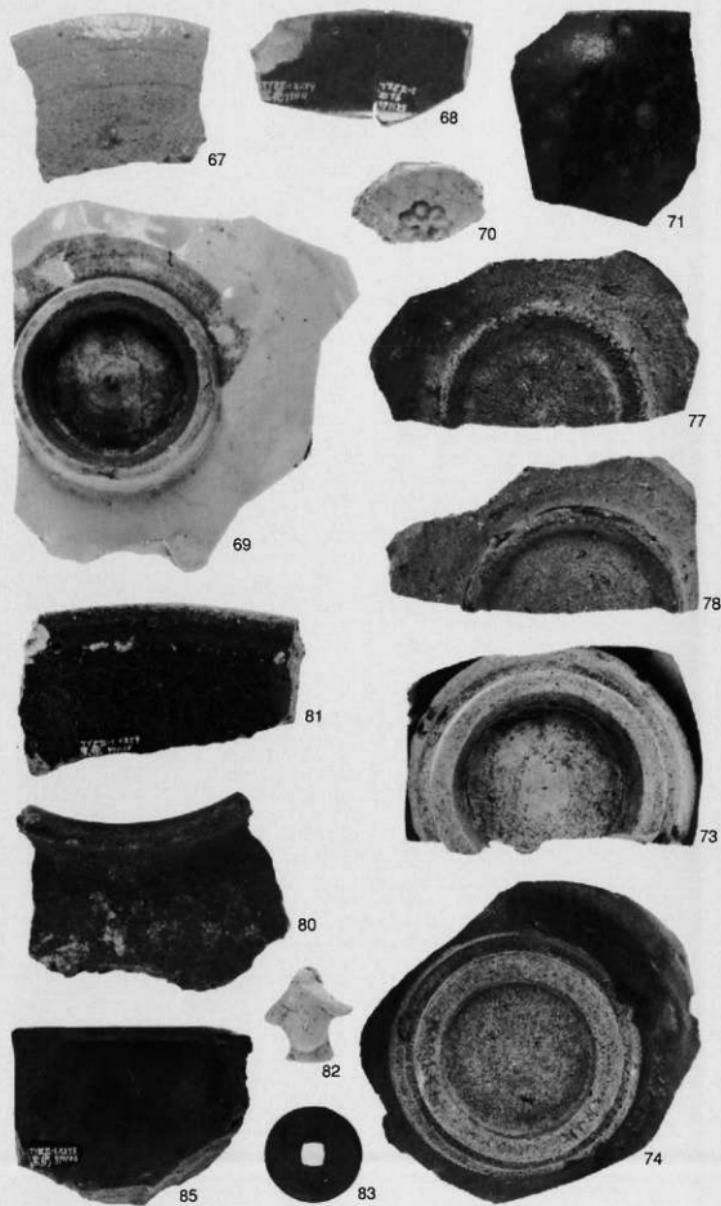
64

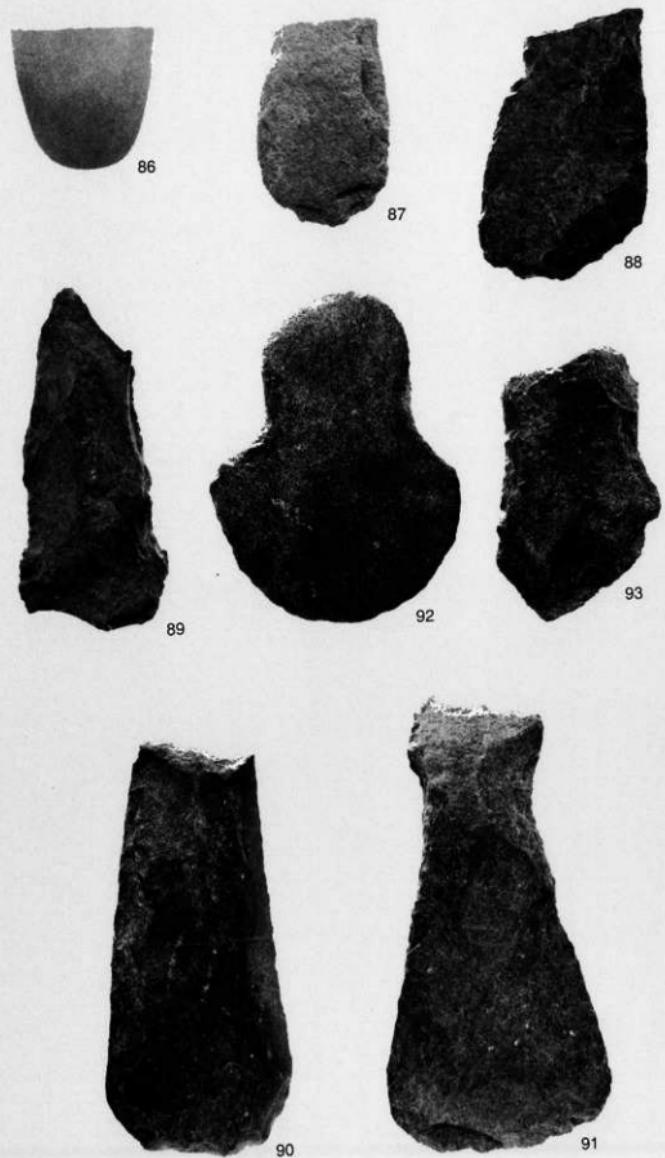


65

圖版13

遺物寫真
包含層





ふりがな	よこざわにいせき						
書名	横沢II遺跡						
著者名	主要地方道富山立山魚津線の工事に伴う発掘調査						
編集者名	三鍋秀典・新本真之・中島義人						
編集機関	立山町教育委員会						
所在地	〒930-0221 富山県中新川郡立山町前沢2440番地						
発行機関	立山町教育委員会						
所在地発行	〒930-0221 富山県中新川郡立山町前沢2440番地						
年月日	西暦1998年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
五郎丸	富山県中新川郡 立山町横沢	323	014	36° 41' 2"	137° 18' 20" ~ 971219	3500	主要地方道の バイパス工事 に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物	特記事項	
横沢II	集落跡	縄文・古代・中世・近世	穴・溝・土坑・流路		縄文土器・石器・土師器・須恵器 ・土師質器・中近世陶磁器・貨銭 ・木製品		

横沢II遺跡

主要地方道富山立山魚津線の
工事に伴う発掘調査

立山町文化財調査報告書第27冊

発行日 平成10年3月30日

編集・発行 立山町教育委員会

印 刷 株式会社 チューエツ

